特集テーマからの一視

旅行・観光分野における 実践的学術研究機関の構築に向けて

公益財団法人日本交通公社会長

典人

には調査研究専門機関化五〇周年 が認められ公益財団法人に移行し、 に、これまでの公益的な活動実績 強化し、事業を活発化させた。 二〇一二年 (平成二十四年) □○一三年(平成二十五年)十二月 そして、創立から百年)四月 目 0)

取り組み 五〇周年記念事業への

目的で、 あるいは研究成果を社会に還元する ●「観光資源の評価手法に関す この期にあたり、当財団の知見 と、これに基づく写真集の発刊 る研究と資源台帳の作成 記念事業に取り組んでいる。

当財団自身は、観光・旅行に関する 会社日本交通公社として分離設立し、 目的に創設され、一九六三年(昭和 な観光および旅行業の黎明期か 調査研究専門機関として内部体制を ら、その発展過程を共に歩んできた。 三十八年) 十二月に営業部門を株式 九一二年 (大正元年) に外客誘致を 当財団は、日本における近代的

●立教大学、琉球大学における寄

好の機会と捉え、特別号として、こ 財団がどこまで果たせたのか、また 研究のために、期待された役割を当 化の発展あるいはそれを支える観光 いては、当財団が共に歩んできた日 これからどのような役割、使命を果 と現状を検証しつつ、日本の観光文 本の観光研究および観光政策の変遷 たすべきなのか、を問い直すべき絶 さらに、本誌『観光文化』にお 等がある。

時代の潮流と 観光の位置づけ

一九〇〇年代初頭、日本の近代的

●観光地経営に関する研究とテキ (二〇一四年五月発刊予定) と実践』二〇一三年十二月発刊 ストの作成(『観光地経営の視点 は観光政策に焦点を当てられたのは の対応策として、観光立国、あるい て以来、国家が直面する重要課題へ な観光および旅行業が産声を上げ

『創業1912年から一世紀 門機関 五〇年の歴史』(二〇二 発的進化へ向けて~調査研究専

付講座の設置

年十二月発刊

の特集を組むこととした。

を迎えることができた。

の出自である。 してジャパン・ツーリスト・ビュー 本が国家として体をなさなくなった ローが設立された。それが、当財団 致論が起こり、その対応策の一環と 府の財政が疲弊したことから外客誘 大きく捉えて三度あった。 二度目は、第二次世界大戦後、 最初は日清、日露の戦役の後、

としての役割を設定した。 旅行に関する専門の調査研究機関 として誕生した。当財団は、こうし 本交通公社などの旅行会社が陸続 しての自立性を獲得し、株式会社日 ある。そのなかから旅行業が事業と 時期の復興策としての観光立国論で た時代の潮流に寄り添う形で観光

重要性は社会全体の共通認識ともな として、公益的見地から国、 て「観光立国」が宣言され、 済の疲弊、グローバル化のなか、改め 三度目は、二一世紀に入り、地域経 当財団としては、公益財団法人 ・観光の 地域の

わが国の政府債務残高の名目GDP等に対する推移

250 日本交通公社公益財団法人への移行(2012) (%) 観光立国宣言(2003) ジャパン・ツーリスト・ビューロー設立(1912) 200 日露戦争(1904~1905) 日本交通公社調査研究専門機関化(1963 バブル経済崩壊(1991) 150 日清戦争(1894~1895) 朝鮮戦争(1950~1953) **〜平洋戦争(1941~1945)** 100 50 XII3 1918 MANTE 1926 13 1938 WEIGHT 1880 . 19 (19AA) 9,4920) 1,4932 29 (1896) 35 (1902) 41 (1908)

財政の健全化」説明会資料 (平成24年4月26日最新版) を基に 出典:財務省「社会保障と税の一体改革の概要 公益財団法人日本交通公社にて作成

済の好循環とともに政府債務は解 次世界大戦、 国力が回復した。 朝鮮戦争を契機とし A9 (197A) 25,7950 31,1956 37,7962 61,1986 10 1998 16 20A 13,7968 55 7980 22,2010) その結果、 (年度) 経

として観光に取り組み続けなければ 的な視点に立ち、 束への契機をつかむことが困難であ 状況下で、政府債務が極大化し、 済の革新を強く意識した国家戦略 これまでの二回とは異なり、 条件が付与されている。このため るというかつて経験したことのない 少と高齢化という国家規模の縮小の しかし、三度目の今回は、 わが国の社会・経 超長期 人口減 収

り、昭和二十四年 (一九四九年) 三

本がある。東京都総務局観光課によ

戦後間もなく刊行された二冊

月に発刊された『観光の理論と実際』

(37ページ参照) と同年十月に発刊

第 国家戦略、 0) 観光についてもインバウンド

究していくことが使命となった。

日本

を抱えていた。それは政府債務の膨 の経済において共通した大きな課題 この三度の時期はいずれも、 観光のあり方、旅行業の可能性を追

大化であった。

度目と二度目は、

それぞれ

ことになった。特に、 から自然体で内需中心に移っていき

済政策、 境の下、旅行の大衆化が進展し、 施設のあり様、旅行スタイルも大き 泊施設の大型化等、 備が格段に進んだ。こうした社会環 の増大、高速交通網等のインフラ整 国総合開発計画等、 変化した。 光は、国家政策としても、国民生活 の高度経済成長時代のなかでは、 においても、その位置づけが大きく 国土政策によって、 国民所得倍増計画や全 観光地・観光 国家主導の経 中間層 観 宿

く変わることとなった。 親光の位置づけが相対的に下がる すなわち外貨獲得として 朝鮮戦争以降

> 日本の観光研究・ 観光学の概観

してみる必要がある。 本の観光研究、観光学は何をなし得 方、こうした日本の観光に、 何をなし得なかったのか、 Н

「観光講座」に学ぶ

り組まれなかったと考えられる。 光研究、観光学として総合的には取 て存在していたものの、体系的な観 造園学等それぞれの学問の部分とし 風景論・景観論、建築土木学、 次世界大戦以前においては、 日本における観光研究は、 (1 ま、 地理学 林学、

東京都が開催した「観光講座」 昭和二十四年三月の二度にわたって された『観光読本』である。 これらの本は昭和一 一十三年三月と

ならないだろう。

特集テーマからの

内容をまとめたものであるが、当時の日本交通公社理事長高田寛をはじめ、光立国論」を述べている。その内容はもちろん、戦後間もない状況を色濃戦後間もない状況を色濃ものの、今日的課題がほとんど網羅され、提起さとんど網羅され、提起さ

れているといっても過言ではない。その点からみても、第二次世界大戦直後のこの「観光講座」が、欧米の研究水準を意識しつつ体が、欧米の研究水準を意識しつつ体が、欧米の研究水準を意識しつの嚆矢が、欧米の研究水道を (『観光の理》が、欧米の研究水道を (『観光の理》が、欧米の研究水道を (『観光の理》が、欧米の研究水道を (『観光の理》が、欧米の関系を (『観光の理》が、 (『知》が、 (『知》が

この講座については、『観光文化』 215号で観光研究の泰斗である鈴木忠義氏が観光研究を手がける出発 点であったと回想されているととも に、本号においても溝尾良隆氏がそ

先見性が問われる観光研究・

観光学

その後、日本の観光研究は、高度

成長経済のなか、都市開発、リゾーはある程度進んだが、マーケティはある程度進んだが、マーケティはある程度進んだが、マーケティはある程度進んだが、マーケティング、旅行者心理、観光経済効果、フに、一定程度の成果はあるものの、ては、一定程度の成果はあるものの、ともすると、観光振興のあり方につともすると、観光振興のあり方については時代の流れを後追いし、追認いては時代の流れを後追いし、追認しているのではなかろうか。

示することだろう。
に俯瞰して、課題解決への糸口を提は先見性であり、総合的かつ体系的は先見性であり、総合的かつ体系的

電頭に述べた当財団の組織として の変遷は、いずれも、国の観光のあり や社会・経済にとっての観光のあり や社会・経済にとっての観光のあり でじ、役割、使命の変化を受け止 応じ、役割、使命の変化を受け止 がてきた結果だ。しかし、一方では、 めてきた結果だ。しかし、一方では、 ができた結果だ。しかし、一方では、 ができた結果だ。しかし、一方では、 ができた結果だ。しかし、一方では、 ができた結果だ。しかし、一方では、 ができた結果だ。しかし、一方では、 ができた結果だ。しかし、一方では、 ができた結果だ。しかし、一方では、 ができた結果だ。しかし、一方では、 ができたは、 ができた。 とのできた日本の観光が策

自問すべきこと

「時代の潮流と観光の位置づけ」

でも述べたように、これまでの転換 の重要な役割を割り振られ、地域経 の重要な役割を割り振られ、地域経 ミッションを担っているなかで、観 ミが完に何が求められているのかは 当財団として自問すべき大きな課題 である。

向けた糸口を提示していただいた。多面的な視点からこの課題解決に本特集において、各分野の皆様に

特集1から

当財団に在職され、その後、立教大学、帝京大学で教鞭を執られていた学、帝京大学で教鞭を執られている溝尾良隆氏の特集1「わが国観光学研究の離陸と今日的課題」において、観光研究・観光学の動向と当財で、観光研究・観光学の動向と当財団の活動について詳しくご紹介いたごとい

そのなかで観光研究・観光学の今 後の取り組み課題として、観光研究 が高。この指摘からだけでも、数多く がる。この指摘からだけでも、観光 がる。この指摘からだけでも、観光

請」するとしている。

を見据えることができる。 して果たすべき具体的な機能、役割保全に役立つ指標作り等、当財団とれに基づく地域の発展と観光資源のれに基づく地域の発展と観光資源の

特集2から

また、まちづくり、景観学の第一人者である西村幸夫氏からの特集2人者である西村幸夫氏からの特集2に学際的で実践的かつ総合的な力量に学際的で実践的かつ総合的な力量に学際的で実践的かつ総合的な力量が必要とされているか、という問いが必要とされているか、という問いが必要とされているか、という問いが必要とされているか、という問いが必要とされているか、という問いが必要とされているか、という問いが必要とされているか、という問いが必要とされているか、という問いが必要とされているか、という問いが必要とされてよる地元の元気おこし仕方、交流による地元の元気おこした。さらにそれぞれの地域にはそれし、さらにそれぞれの地域にはそれでれの個性があるが故に「方法は対象に依存し、対象が固有の分析を要象に依存し、対象が固有の分析を要象に依存し、対象が固有の分析を要

は普遍的な解法に到達」するという題を深く掘り下げていくと、ついにいかというと、「地域という応用問いかといって、普遍性は必要としな

提起されている。 のが、まちづくりでも観光研究でも、 「研究」の基本姿勢であるべきだと、

性を欠くこととなろう。 場からの視点だけで、一面の真理を 目的である、地域活性化に対し実効 つかんで主張したとしても、本来の あるいは、地域の心情的な主観的立 観光する立場からの視点だけで、

しない限り、いかなる研究活動も単 めることによって、自らの論理を鍛 西村氏が特集2の最後に「実践を深 だ。観光研究の集中力が試されてい 還元もおぼつかない。 なる机上のものに終わり、 ているが、この重要性を改めて認識 え、深化」させることだと結論づけ るという溝尾氏の指摘にもつながる。 自戒も含め、心もとないことも事実 できる力量を持っているかというと、 こうした地域課題を学際的に俯瞰 現在の日本の観光研究・観光学は 本の観光研究が地域のなかで 使命を果たしていくためには、 社会への

特集3から

さらに、観光研究の地域での役割、

題に向き合い、沖縄ブランドの確立 よって変容する観光地の現実的な課 郎氏が、かつて行政の立場で時代に 役割」において、琉球大学の下地芳 の観光まちづくりと産学官の連携 使命については、特集3「地域主体 ての連携の重要性を指摘している。 に尽力された経験から、実践を通じ

進沖 足化論 組観光

大空海時代へ

大航海時代から

下地芳郎著『沖縄観光進化論』(琉球書房) 表紙

-地芳郎

必要性を提起している。 再認識し、資源開発や受け入れなど 活性化に大きく貢献していることを かで「観光客が地域経済発展や地域 立までの道筋と課題を挙げ、そのな に関して幅広い関係者が連携」する 「観光地ブランド」の重要性と確

人材育成のための「人材交流」を挙 例の調査研究」「失敗事例の研究」、 財団への期待として、 この提起を通じて、とりわけ、 「海外先進事 当

> げている。すなわち、産学官連携の う指摘だろうと思う。 皿としての役割を果たすべきだとい 観光地における実践的な知的受け

はいうまでもない。 なれないし、その役割でもないこと はいえ、地域の観光振興の主役には ただ、当財団は、いくら実践的と

を導き出す助産師になることだろう。 を提示し、地域特性に見合った「解 う諸矛盾の解決策についての選択肢 ドルは高いが、地域の観光振興に伴 当財団が果たすべき役割は、

座談会から

創生計画2020」を、特集5の座 例として、「阿寒湖温泉再生プラ 果たしたと評価を頂いている事 談会「北海道における観光研究の理 ン2010」と「阿寒湖温泉 論と実践」のなかで取り上げた。 この助産師的役割を当財団

の結集力が何といっても力になって だが、同氏を中心に行政、 ループ代表の大西雅之氏の強いリー ダーシップによるところが大きいの 阿寒湖の観光振興の進展は鶴雅グ 地元住民

いる。

コンサルタント等として常に多面 に参画してきた。 を構築する際に、十三年ほど前から、 ヨ財団がプランナー、 その具体的なビジョンや振興計画 アドバイザー

に求められていると同氏は指摘して に積極的に」関わることが、当財団 示だけでは動けない」、 「プランの作成やあるべき姿の提 「実行の部分

ということだ。 ではなくとも「私計画する人、あな たやる人」では、実効性が伴わない すなわち、地域での実践は、

このことが求められている。 究に対するスタンス」に通底してい 氏とともに作った、当財団の元常務 的な姿勢として、当然のことながら デンティティがあり、西村氏の「研 きるかが基本」だとするのも、そこ そのなかで普遍性をどこまで追究で プラグマティズム、個別解に徹し、 理事原重一氏が「現場主義に加えて に観光研究に携わる者としてのアイ このプロジェクトのきっかけを同 当財団が地域に関わる時の基本

ーマからの



特集4から

財団の前常務理事小林英俊氏から、 ともに提起している。その意義を当 ている人々との関係性において極め て重要であることを溝尾氏、 成果の収集およびその科学的分析と として、さまざまな実践事例や研究 公開は、地域や行政、政策に携わっ さらに、当財団の果たすべき役割 下地氏

> 特集4「『なぜ』から『今』を考え り口から寄稿いただいた。 にて、シンポジウムの開催という切 る楽しいシンポジウムを目指して」

考え、共に本質をつかんでいくプロ セスを伝えることだと指摘している。 研究者、パネリスト、参加者と共に た知見を披瀝するだけにとどまらず 最も重要なことは、単に蓄積され

> 解してもらうことも当財団の大きな 幅広く他産業の方や一般の方々に理 シンポジウムの意義は、「旅行や観 役割だ」と、明確な方向性を示して 行・観光産業に携わる人だけでなく 光の価値や社会における意味を、

巻頭言から

化されて、これが経営や行政の実務 知見として集積され、体系化・理論 を総括する形で、 られた役割は明確だ。 ここでの観光研究・観光学に割り振 成」されるべきであると述べている。 ィードバックされ、観光マネジメン の変革を促し、その結果が分析・フ に触れ、「各種の取り組みが科学的 頭言において、産学官連携の重要性 トの高度化が図られるサイクルが形 課題認識、問題提起そして提言 本保芳明氏は巻

先見性ある 実践的学術研究機関を

特集5の座談会「北海道におけ

る観光研究の理論と実践」のなかで

提起した「サイクルの形成」の軸受 展、そして地域経済の発展と魅力 のことが要諦となろう。 けとして当財団が機能すること、そ いる旨を表明したが(注)、本保氏が 当財団が十年後のあるべき姿として 「実践的学術研究機関」を目指して 当財団が、日本の観光研究の進

興に真に貢献していくためには、 的な観光地の形成、観光文化の振 銘じたい。 をつけなければならないことを肝に 割」を果たせるだけの組織的地力 に関する「知的インフラとしての役 性豊かな研究者集団として、観光

長年、当財団の事業運営、 る次第である。 皆様に、ご寄稿、座談会でのご発言 た学識経験者、有識者、 動にご指導、ご助言をいただいてき などのご協力を賜り、心より感謝す 最後に、この特集を組むにあたり 実践者の 研究活

しが のりひと)

(注)『観光文化』217号 (二○一三年四月) 「財 通公社「22ビジョン」について」参照。 団活動のいま…」の「公益財団法人日本交

観光の理論と実際 (第一回観光講座全集) 東京都総務局観光課編

目

次

観光立国論 …… 参議院議員 日本交通公社理事長 高田 寬

観光理念の普及徹底―観光事業法規の整備―外国の観光事業 政の統一―観光国土計画の樹立―観光施設の整備―観光宣伝―観光事業機関の整備 事業―文化国家と観光事業―観光国としての日本―観光事業振興の主要点―観光行 経済復興と観光事業―文化政策と観光事業―日本再建と観光事業―失業救済と観光

2

観光産業論 …… 参議院議員 木村

観光事業の重要性―経済復興と貿易―国際収支と観光事業―貿易五ヶ年計画の想定 日本自立計画の推進―日本経済再建の鍵―観光事業振興の急務 禧八郎

二、観光事業の理論

1

観光事業概論 …… 全日本観光連盟副会長 新井

観光事業の目的―観光事業の要諦―戦前の活動状況―戦後の観光事業

観光資源論 …… 林学博士 二つの資源―人文的資源―自然的資源 田村

2

観光と都市計画 …… 東京都建設局長 石川

3

形式―観光と国土計画―結語 観光の本質―都市美の問題―郷土性―日本の都市―日本の名都―都市観光娯楽の諸

観光東京の今昔譚 …… 東京都史編纂委員 安藤

4

数々―江戸時代の観光出版物―明治以後の公園 船遊山の今昔―観光と社寺詣―江戸時代の郊外名所―植樹と桜の名所―名庭園の

三、観光事業の経営

観光事業経営論 …… 早稲田大学教授 商学博士

序言―観光事業の目的並に性格―観光事業経営法則の把握―法則探求の方法―余論

サービス編 …… 徳川

2

サービスの目標―景色だけでは駄目―観光事業の根本―支配人の感覚―経営者の心構 え―旅行者の集まるホテル―接客態度の問題―ガイドとクーリエ―コンパニヨン―主 観な考え方不可

3 観光宣伝論 …… 株式会社花王常務取締役 新保 民八

観光客の対照―観光客のねらい―ホテルと観光宣伝の実例―協同広告の効果―パブリ

4 見返品と観光物産 …… 観光物産連合会理事 宮田 勝善

改良―外人の性格に適した品物―設備サービスの改善―結論 対外信用を傷つける乱造品―高級観光品の研究―良品安価主義―貿易品と観光品の

5 新たに発展を予想される観光事業の話……全日本観光連盟事務局長 武部 温泉の宣伝―スポーツと観光―大規模なスキー場施設―ゴルフ場の復活―ホテルとス 観光港別府―日本列島巡航―ヨットハーバー―欧米の温泉場―温泉とカジノ―日本式 島国日本―火山と温泉の国―変化に富む気候と地形―観光日本を左右する三エス― 英治

観光施設論 …… 運輸省観光課長 間島 大治郎

ポーツ施設―外客誘致の世界的競争

6

特殊な観光施設―観光事業と自動車―海の観光と港湾及船舶―その他の諸施設 観光施設整備の急務―観光施設の概要―道路の改良、新設、整備―交通機関の問題

接客の実際 …… 日本ホテル協会理事長 高久 甚之助

7

サービスを生命とする職域―従業員の人格と教養―旅館業者の公共的使命―すべてを 接客業者の心構え―お客の心理の研究―絶対公平と薄利多売―接客商売の極意― 経営本位に―安心して泊れる旅館―チップ廃止論―日本人生活改善の先達に

国際観光一般

四

戦後の海外観光事情 …… 雄鶏通信編集人

海外旅行―旅行者の心理―経済、貿易、政治関係―各国の観光状態―アメリカの国内 観光―自動車―鉄道―バス―飛行機―航空会社と汽船会社の協定―汽船―世界一周― 国際的な行事―日本への観光客―結語 春山

2 アメリカの印象 …… 毎日新聞欧米部長 高田

強烈なアメリカの印象―玄関口の印象―接客業者の態度―身軽に旅行する―自由競争

の国―能率的なサービス競争―揃っている文献―淡白したアメリカ人―観光に力を注ぐ

欧州旅日記 …… 朝日新聞編集局総務室 渡邊 紳郎

3

観光事業への注意―雪のあるクリスマス―日本の不愉快な名物 英宣伝―婦人の世界―遊興事業と観光設備―欧州観光事業の目標―国立温泉―日本 観光客誘致の一策―パリの土産品―米人の欧州旅行コース―自動車道路―スイスの対

観光と自然 …… 共同通信編集局長 松方 義三郎

4

鉄道問題―ユングフラウの場合―開発の限界―よき社会の建設―スイスの山小屋―日 観光とその基本条件―二つの天国―観光と愛郷心―自然擁護の戦い―マッターホルン

ガイド商売往来 …… リーダースダイジェスト日本支社 殖栗

5

日本欧米往来の歴史―ガイドの草分―観光局の開設―各国ガイドの印象―米案内業 者の一例―客の趣味を知ること―案内者としての心得―案内者に対する要望―ユーモ アの必要―ストーリーを忘れるな―不断の研究努力

日本風土記 …… 文学博士 中村 孝也

6

観光事業の将来 型風土―立体的類型風土―日本風土の共通性―風土と人間生活―風景内容の分析-はじめの言葉―日本周辺地域の風土―日本の風土―日本風土の地域的類型―平面的類

出典:「東京都總務局觀光課編『觀光の理論と實際』第一回觀光講座全集」(昭和二十四年四月発行)を基に 現代仮名遣い・常用漢字に置き換えて公益財団法人日本交通公社にて作成